●論文●

エコミュージアムに関する国際会議等における議論の経緯　～50年間を振り返って～

大原一興
横浜国立大学

はじめに

ICOM（International Counsil of Museums 国際博物館会議）1971 年大会において、初めて écomuseé という言葉が発せられてから、この半世紀の間に、世界的にエコミュージアムの理念と実践が広がり、情報交換や研究交流などの数々の国際的な会議が世界各地で開催され、各国の連携組織や国際的なネットワークが形成されてきた。近年、これまでの経緯をふりかえり見直しをする文書や会議なども散見されるようになった。この 50 年間という長い期間を、いささか粗い考察になるが概観することとし、各時点における議論のテーマや国際的動向などについてエコミュージアムとその国際会議に求められているテーマを整理し、これまでとこれからのエコミュージアムの取り組むべき課題について確認し考察したい。

１．エコミュージアム（エコミュゼ）誕生の時期

（1）世界の動きから生まれたエコミュージアム

エコミュージアム（エコミュゼ）という名称は、1971 年 9 月 3 日、ICOM の大会時、ディジョンにおいて当時の環境大臣Ｒ．プジャッド（Robert Poujade）によって公表された。これを言葉の公式な誕生とするが、言葉の発案者であるユグ・ドヴァリーン（Hugues de Varine）は、その後何度か講演等では、エコミュージアムは 60 年代の終盤から世界の各地で起きていた同時多発的な博物館の活動であって、とくにこれまでの博物館が建物に閉じこもっていたことに対して、地域社会や環境との一体化をはかっていく様々な意欲的な試みに対してつけられた名前であると語っている。例えば、後述する貴州会議における講演の中で、エコミュージアムが生まれたことについて、次のように記している（注 1）。

> それらは組織化されてできたものではないし、博物館学の専門的な仕事の中ではほんの少数にすぎなかったが、何かを発明するための準備は整っていたのだ。これは 1970 年代の最初の数年間に、ほとんど偶然に起こったことなのである。

当時の参照すべき動きとしての、アフリカやアメリカ、メキシコ、スウェーデンなどでの、地域博物館の新しい動きについて紹介している。それらは、エコミュージアムという名称は持っていなかった。ドヴァリーンは、この会議の前後に、多くの著書の中で自己のエコミュージアム創設に関わる経験を述べる中、エコミュージアムはそこで企画され作られたものではなく、時代の産物であったことを、繰り返し説明している。

G.H. リビエール（George-Henri Rivière）と H.ドヴァリーンは、国際的な組織 ICOM のディレクター（リビエールは初代 ICOM ディレクターを 1948-65 に務めた後 1968～永久顧問-、ドヴァリーンは 1965-74 にディレクター）という立場に身を置いていたため、世界各国の情報を広範に得ており、かつそれは最新の情報であった。国際的な情報の交流は、もちろん ICOM 大会やワークショップなどの、人の集まる場で活性化するが、彼らはその立場によって、会合としての国際会議と同じように情報が集積される場に

居たと言えよう。その点から、エコミュージアムはある一人の発明家によって生み出されたものではなく、当時の世界の各地で湧き上がってきていたものがお互いに相互に仲間であることを認識することによって生まれてきた共通理念であると言える。

（２）エコミュージアムという命名

そして、エコミュージアム（エコミュゼ）という名称が発せられたのは 1971 年 ICOM のフランスにおける大会（パリ、グルノーブル、途中でディジョン）であり、エコミュージアムと関連の深いメキシコとベナンからの講演があったものの、その時はエコミュゼという新しい言葉の紹介が環境大臣から為されたという政治的なセレモニーに近いものと思われ、討議や協議をするという形式ではなかった。実際、ドヴァリーンは最近の著書での述懐で「1971 から 1972 年、私は『エコミュージアム』という言葉を発明し、即興で定義づけを行いました」（注 2）と記している。エコミュージアムが、いくつかの先駆的な実践から生まれた概念であり、この言葉を後から定義づけるには苦労をし、その後、国単位や世界の会議の場面でも未だに議論され続けている。

実際にその内容については、翌年 1972 年 9 月、ボルドーでの ICOM シンポジウム「博物館と環境」で討論がなされたが、そこでは環境博物館としての方向性が主となり、ドヴァリーンの考えるコミュニティのミュージアムという方向性の議論はまだ緒についたばかりであった。（注 3）

（３）サンチャゴ・デ・チリ円卓会議

本来のエコミュージアムの中心的な議論は、実はドヴァリーンらが企画した、1972 年 Santiago de Chili の円卓会議で行われた。その後のエコミュージアム、コミュニティミュージアムにとって（新しいミュージアムの本質にとって）方向性の確信を得る議論がなされた歴史的会議だった（注 4）。この会議は、「現代ラテンアメリカの社会的・経済的ニーズと博物館の役割についての円卓会議」とされ、「サンティアゴ・デ・チリ宣言」（1972 年）を提案したことで、博物館は社会の開発と統合するというドヴァリーンらの理念から「integral（統合）博物館」を目指すことが掲げられた。この言葉もまた、何と何を統合するかという点でその後多義的に解釈され、エコミュージアムの定義や条件を拡散している。ここでは、博物館が「社会とその発展のために奉仕する」という考えがまさに講演会やシンポジウムではなく円卓会議という国際的な協議形式によって、確立されたことが意義深い。このことは、ドヴァリーンの ICOM での大きな仕事としての 1974 年の ICOM の博物館の定義の改訂にも反映されている。

（４）ICOFOM 委員会での議論

これに続く動きとしては、ICOM の組織において、1970 年代と 80 年代において、様々な組織上の葛藤と展開の経緯がある。リビエールとエコミュージアムを進めるグループが、本流を固める保守的な博物館論者との間で緊張的関係が生まれていた、とデイビスは解説している（注 5）。

まず、ICOFOM（博物館学国際委員会、International Committee for Museology）が、ICOM 傘下の正式な国際委員会のひとつとして 1977 年に設立している。この委員会の最初の委員長は、ちょうど 1971-77 年に ICOM の会長職を務めていたチェコスロヴァキア出身のヤン・イェリネク（Jan Jelinek）であり、実践や技術（museography）ではなくむしろ博物館はどうあるべきかという理念（museology）を探るべく、1980 年の第 3 回の年次大会（メキシコ）では、博物館学における社会的なシステムに言及し、1982 年（パリ）でももっぱら博物館学の大系についての議論がおこなわれた。実は、これらの動きには、GH リビエールが自ら指揮をとる一面もあった（注 6）。メンシュはこの頃のいきさつを資料をもとに記している。

> 第 3 回年次総会（1980 年メキシコ）は大混乱に終わった。予定されていた講演のうち、実際に行われたのはわずかで、リビエールは、委員会のセッションに自分のアプローチを押し付けようとしていた。委員長欠席で 1981 年の委員会は開催されなかった. 1982 年のパリでの会議は、またしてもかなり混沌としたものとなった。メキシコの時と同様に、イェリネクが出席できなかったためにソフカ（Sofka）が議長を務めた会議を、リビエールがコントロールしようとしたのだ。主な問題は, ICOFOM におけるエコミュージアム・新博物館学の地位であった。

ICOFOM 委員長は次の会議（1983 年ロンドン）からソフカに交代し、以後委員会は、現在まで博物館学の出版物（論文集）ISS（ICOFOM Study Series）を編集するという基本活動方針が貫かれている。一方で、エコミュージアムと新博物館学の議論を進めるメンバーは、ピエール・メイ

ラン（Pierre Mayrand）を中心として、1984 年にエコミュージアムに関する特別セッションを開催する準備を進めていたが、開催が急に中止となり、宙に浮いたカナダのメンバーたちの不満がたまり、彼らは ICOFOM とは別個に独自にケベックで「エコミュージアムと新博物館学のための第 1 回国際ワークショップ」を開催した（1984 年 10 月 8～13 日）。この会合では、ケベック宣言として知られる政策声明が採択された（注 7）。

そこで、ICOM の内部対立のような事態を明確化することは得策ではなく、しかしこのテーマに関しての関心層のために、さらに自由にこの展開を先に進めるために、関係者がとった行動は、ICOM 直轄の国際委員会（International Committees）ではなく、加盟機関（Affiliated Organisation）としての新しい組織 MINOM （新博物館学の国際運動 Mouvement International pour une Nouvelle Museologie）を設立することだった。これによって、ICOM の守旧派と意見の相違があっても、自由に活動ができるように併走できるようになった。この後も、エコミュージアムの活動メンバーも ICOFOM 委員だった者はとどまり、分裂という事態をさけた穏便な解決だった。さらに MINOM の展開については、2 の（3）で述べる。

２．各地のエコミュージアムの国際会議におけるテーマ

（1）ブラジル

これまでブラジルでは、ABREMC（Associação Brasileira de Ecomuseus e Museus Comunitários　エコミュージアムとコミュニティミュージアムのブラジル協会、2007 年に結成）らのグループにより H.ドヴァリーンのリーダーシップのもと、国際会議が 5 回開かれている。そのうち、3 回はリオデジャネイロで開催された。

① 1992 年　EIE（Encontro Internacional de Ecomuseus）Rio de Janeiro　5 月 18-23 日

初回のこの時は、国連環境開発会議（UNCED　地球サミットと称される）が 6 月に開催される半月前、リオデジャネイロ中心部で開催された。1972 年の人間環境会議の向けてエコミュージアムが発せられたのと似た設定に思われるが、ブラジル国内においてリオ会議のテーマに何らかの博物館からのメッセージを残しておきたいとの意図だったと思われる。このときの主催は、リオ市当局と観光局などによるもので、国際会議といっても海外からのゲストとして、フランス（ドヴァリーン）、ポルトガル（M.マウチーニョ）、カナダ（R.リバール）からのエコミュージアムの講演が行われたものである。ここで、リオデジャネイロ州の西側の地域の遺産を保存するプロジェクト（西側地域プロジェクト）として、第 2 回の開催地となるサンタクルス、マタドウロ地区においてエコミュージアムを設立するとの提案がなされた。

② 2000 年　II EIE / IX ICOFOM LAM 2000 （II Encontro Internacional de Ecomuseus: Comunidade, patrimônio e desenvolvimento sustentável. IX ICOFOM LAM: Museologia e desenvolvimento sustentável na América Latina e no Caribe）Santa Cruz, Rio de Janeiro , Brasil, 17-20 maio de 2000

このときのテーマは、「コミュニティ、遺産と持続可能な発展と博物館学」と銘打って、サンタクルスの街のエコミュージアムの具体的な姿を描くことを目的に進められた。地区の中心センターとなる食肉工場マタドウロの建物の紹介など、エクスカーションを含めた現地でのディスカッションが実施された。国際会議の開催を、世界から目を浴びていることの証拠として、地域の政治家へアピールする手段として活用している。ここで討議されたことからは、中南米の共通課題として、博物館技術学 museography（ハウツー）ではなく博物館学 museology（その存在意義）への探求、貧困からくる文化遺産の滅失への危機感、文化財の盗難、破壊、不法占拠への防護策、つまりコミュニティ自身による遺産の自主管理の方法、教育の必要性への指摘などが次々と議論された。主催者の一翼を担う ICOFOM-LAM（ICOFOM の中南米 Latin America のグループ、1991 年設立、後にカリブ諸国を含めて ICOFOM-LAC となる）は、ICOFOM の中でも活発なグループで、現在までにも 20 回近いワークショップをおこなっているが、その第 9 回目にあたる。

「integral（統合）博物館とそのシナリオ」とのテーマにもとづいて開催された。自然、歴史、文化など学術領域の統合と同時に、もともとの意味として地域社会の開発との

統合を目指している（注 8）。会議の記録は ICOFOM LAM の論文集として刊行されている（注 9）。

③　2004 年　III EIECM/ X atelier MINOM（III Encontro Internacional de Ecomuseus e Museus Communitarios / X Atelier Internacional do MINOM Cultura e Democacia Participativa , 13-17 Sep.2004）　Santa Cruz, Rio de Janeiro

サンタクルス地域における２回目となる会議も世界各地からの参加を得て盛大に行われた。この回は、実行委員会に MINOM が加わり、同組織のほぼ毎年行われているワークショップの第 10 回と位置づけられている。圧倒的にラテン語圏の参加者に占められていた前回と異なり、使用言語にも英語の報告なども多く含まれることになり、より国際的に広がりをみせた。この時のテーマは「コミュニティ、遺産の共有と教育（EIE）、文化と民主的参加（MINOM）」があげられている。市民の文化的活動の重要性を議論し、例えばどのように参加をつのるか、そのための博物館・教育機関の役割などの議論で、この時の参加者の中でも英語圏の参加者は少数派であり、英語での論文発表に関しては、のちに「博物館と市民」として、イタリアのグループの手によって英語論文集として再編集され、さらにそれをイタリア語版に翻訳するという形で再編集された。

この時から、イタリアでエコミュージアムの急成長が始まっていた時期で多数の参加がなされ、例えば、地域遺産を市民で共有すること　市民性の醸成とそのための教育の重要性などという提案（注 10）や、イギリスからのエコミュージアムとして地域一体にミュージアム活動をすることにより、アウトリーチではなくインリーチという概念が提唱される（注 11）など、理論的にも議論が深まった会議となった。イタリア、ピエモンテ州の研究機関によるイタリア語の論文集が刊行されている（注 12）。

④　2012 年　IV EIECM （Encontro Internacional de Ecomuseus e Museus Communitarios）　Ecomuseu da Amazônia, Belém

テーマは、「地域開発　遺産とエンパワメント（Local Development :Heritage and Empowerment）」と決まり、ブラジルでこの時点では新たにエコミュージアム運動が始まっていたアマゾニア・エコミュージアムの起点地域となる都市ベレンで開催された。この時は、ブラジル、南米中心の参加者で 400 名位を占め、ポルトガル、スペイン、フランスから数名が参加した。アマゾニア・エコミュージアムの設立と運営の支援として国内中心の会議となった。ほとんどがポルトガル語によって各地の実践報告がなされた。

⑤　2015 年 V EIEMC （V Encontro Internacional de Ecomuseus e Museus Communitarios）,UFJF（ Juiz de Fora 連邦大学）

5回目については、UFJF（ジュイスジフォーラ連邦大学）が主催し ABREMC と協力の上で、ブラジルおよび海外のいくつかの機関と協力し「コミュニティ博物館学」を中心テーマとする会議を開催した。「イニシアチブ : 幸福のための道を築く」とサブテーマを設けて、この時はイタリアからの参加も多く、イタリアとの交流が深まっていった。この翌年のミラノ大会におけるフォーラム開催の伏線となるべく、国際的な交流の機運が再び高まった会議となった。

（２）アジア

次なる展開としての、アジア諸国における国際会議は、日本エコミュージアム研究会が 1985 年、設立記念の大会にフランスとスウェーデンから講師を呼び、エコミュージアムの日本における定着と発展を望む声に応えて、ヨーロッパの取り組みを報告してもらったことが複数国からのゲストによるシンポジウムを開催したことが歴史には記録されるが、ここでは国際的な議論をおこなったわけではなかった。アジアにおいて先進的な始動は日本であったが、2000 年代にはいってからの動きになるが、中国ではしばらく検討されてきたエコミュージアムを実現させ、その事例をもとに各国からの関係者が一同に介した文字通りの国際会議がおこなわれた。

①　中国　－貴陽国際会議 2005－（貴州省）

アジアでの注目すべき国際会議は、2005 年 6 月 1-6 日、中国貴州省貴陽で開催された。貴陽国際会議のテーマは「交流と探索」で、世界各国からのエコミュージアム関係者の情報交流をはかり、その意義を深め、方向性を確認し、さらに中国で設立された新しいエコミュージアムをみなで探索するという企画である。貴州省は、中国の中でも少数民族の集落が数多く残っており、文化もそれぞれの民族により、多様に異なっている。同化政策もある一方、それぞれの文化的アイデンティティは保全する必要性があり、博物館界では、それらの文化が失われることは大きな問題としていた。地域社会の住民による自律的な環境文化の保

存が求められていることから、エコミュージアムによる博物館化 musealization が必要となった。しかし中国、貴州省では国内外からの観光客の誘致に関心があり、この時期、主に国内外からの観光客に向けてアピールするためのお披露目をまず海外からのゲストに行い、展開していく上での反応を見たかったのだと思われる。

実は貴州省のこのプロジェクトは、中国とノルウェーの博物館界における共同事業であり、2001 年に急逝したノルウェーのエコミュジオロジスト、J.A.イェストルム(John Aage Gjestrum)が極めて熱心に取り組んで実現したものであり、彼への敬意のもとに、世界でエコミュージアムに取り組む多くの人たちが参集した会議でもあり、この時点での世界各国の到達点としての実情と課題が明らかになったものである。交流というひとつのテーマからは、さらなるアジア諸国での連携や交流を予感させるものだった。会議には 17 カ国（ノルウェー、スウェーデン、イギリス、フランス、イタリア、南アフリカ、アメリカ合衆国、ブラジル、オーストラリア、インド、ベトナム、フィリピン、インドネシア、韓国、台湾、日本、中国）から、エコミュージアムの実践者や研究者が多数参加した。（中国国内では台湾はカウントせず 16 カ国と報道された）

J.A.イェストルムとスー・トンハイ（Su Donghai）によって理論的に推進されたこのプロジェクトからは、エコミュージアムの基本理念の整理から「六枝原則（the Liuzhi Principles）」としてまとめられた基本原則が、エコミュジオロジーとして大きな成果であると言える。（注 13）

2005 年の時点で中国のエコミュージアムは、貴州省を中心として数カ所が設立されていた。貴州省には 4 カ所、その他、広西チワン族自治区、モンゴル自治区にも設置が具体的に進んでいる。３年間で 10 箇所とも言われ、その急激な立ち上がり方に参加者からは疑問視する意見もあがった。探索という面では、いくつかの成果として実施された中国エコミュージアム事業を現地に赴き、評価し今後を模索するということであった。実際に参加した者からの評価は、①テーマパークのような観光事業化に対しての否定的意見が強かった。ツーリスムは地域活性化の重要な要素だが、ショー的要素ではなく、より民族の地域文化を見直すきっかけとしてのエコミュージアムへと方向転換することを期待する声が大きかった。②ただ集落を公開するのではなく、アクターとしての住民のトレーニングの必要性があるのではないか。　③民主化に関する議論が湧き上がった。つまり、誰のためのミュージアムなのか、民族の誇りを意識する文化センターとしての意味を持つべきだ、などの議論がつきなかった。とくにヨーロッパからの参加者にとっては強烈な印象を与えたことは確かである。この時の報告論文集は、前述したブラジルの 2004 年の会議と同様に、イタリアのグループの M.マッジと UK の P.デイビスらにより、英語での報告書が作成され、世界各国の交流へと貢献した。（注 14）

なお、中国では 2010 年の ICOM 上海大会において、ICME（民族学博物館国際委員会 International Committee of Museums of Ethnography）において中国のエコミュージアムの報告もなされ、また、MINOM のミーティングが開かれ、再びアジアにおけるエコミュージアムの動向が議論され、3 年後のリオデジャネイロ大会に向けてブラジルの動向も紹介されたが、不思議なことにヨーロッパでの話題はほとんどなく、もっぱら南アメリカ諸国とアジア、オセアニアにおけるエコミュージアムの展開を確認しあう会議となったことも、特筆すべきことかもしれない。2000 年代に入ってしばらくのこの時期は、アジアにおける展開に今後の期待感がたかまった時期だったと言えよう。

② 韓国　寧越国際博物館フォーラム（Yeongwol International Museum Forum）

韓国のヨンウォル（寧越）には、世界遺産もあり、点在する 40 カ所ほどの私設博物館が地域を形成していることから、地域全体を「屋根の無い博物館」として整備するとの構想を打ち立てている。地域全体をミュージアムの村とする構想「Museum Village′ initiative 博物館村宣言」を 2005 年 5 月に発出し、以降精力的に博物館建設に注力し、「世界に通用する博物館村」を目差して内外に知らしむるべく、2011 年から国際会議 YIMF（Yeongwol International Museum Forum）を 5 回開催してきた。

最初の第 1 回目は、ヨンセイ大学との共同で開催し、YY フォーラムと呼称している。村全体が博物館となるということから、形態としてのエコミュージアムということで、第 1 回目と 2 回目ではエコミュージアムの分科会が設けら

れ、議論がなされたが、例えば自然史系の博物館から地域のヘリテージの保全などの重要性が強調されたが、ヨンウォルの地域においては、住民の参加による自律的な運営などについてはまだ意識が無く、その点の議論は未開拓の分野として大きな課題として残っていることが実感できた。

表１　YIMF　の概要

	開催時期	フォーラムのテーマ	参加発表者	参加国
1st YIMF (YYForum)	2011. 05	世界に通用する博物館村	Over 140	20
2nd YIMF	2013. 10	世界の動向から将来の博物館アイデンティティを探る	Over 120	19
			46 Poster	23
3rd YIMF	2015. 10	博物館の役割と国策	56	37
4th YIMF	2016.09	博物館と地方社会	28	14
5thYIMF	2017.09.	未来の持続可能な社会と博物館	28	21

その後、表１のように、5 回のフォーラムが開かれている。2013 年の第 2 回では大きく世界からの参加者が居たものの、第 3 回目以降は規模が縮小された。

（３）ICOM 関連の動き

①　ICOFOM（博物館学国際委員会、International Committee for Museology）

1977 年に発足した後、混乱の中で 1983 年の ICOFOM ロンドン大会がひとつの分かれ道でもあった。委員長がスウェーデン人の V.ソフカに交代、ふたつの大きなシンポジウムが企画された。ひとつは「博物館-領域-社会」と題されたもので、これが、エコミュージアムに関するもの、もうひとつは ICTOP（International Committee for the Training of Personnel 人材育成国際委員会）との合同で開かれた「博物館学の方法論と専門教育」であった。日時は異なっていたが、参加者はふたつのグループに分かれ、お互いに関心が無いようでもあった。

どちらかというと少数派（注 15）となっていたエコミュージアムのグループは、もはや ICOM 傘下の ICOFOM では自由に活動できないと知り、1984 年に MINOM を結成したわけである。しかしエコミュージアムの関心をもつメンバーも脱退・分離した訳では無く、ICOFOM に残り議論を続けていた。ICOFOM では、毎年論文集 ISS を発行し、その時々の博物館学の課題に取り組んでおり、そのタイトルからも、エコミュージアムに関連する議論が、何度となく繰り返されている。関係ありそうなものを列挙すると、SS02（1983）博物館-領域-社会、ISS19（1990）博物館学と環境、ISS22（1993）博物館、空間そして権力、ISS24（1994）博物館とコミュニティ I、ISS25（1995）博物館とコミュニティ II、ISS29（1998）博物館学とグローバリゼーション、ISS39（1999）同上、ISS32（2000）博物館学と無形遺産、ISS33（2003）博物館学－連結と多様性のひとつの道具、といったものである。

また、ブラジルの会議でも共同した ICOFOM LAC（The ICOFOM Regional Subcommittee for Latin America and the Caribbean ラテンアメリカ、カリブ諸国の博物館学国際小委員会、2019 年までは ICOFOM-LAM と称していた）のグループも活発にエコミュージアムの議論と実践報告を繰り返している。1992 年から 2020 年の間で 28 回ほどのワークショップが行われており、関連するタイトルを列挙してみると、第 1 回（1992 年ブエノスアイレス）博物館、社会、環境：統合されるトリロジー、第 3 回（CECA との合同で 1994 年）博物館学、教育とコミュニティアクション、第 7 回（1998 年メキシコのソチミルコ）博物館、博物館学と文化的多様性、第 9 回（II　EIE として MINOM とも共同 2000 年サンタクルス）博物館学と持続可能な開発、第 10 回（2001 年モンテヴィデオおよびプンタデルエステ）博物館、博物館学と無形遺産、第 14 回（2005 年リマ）博物館学と遺産：ラテンアメリカ・カリブ地域における解釈とコミュニケーション、第 20 回（2012 年ペトロポリス）博物館学、遺産、インターカルチャー：インクルーシブ・ミュージアム、開発、異文化間対話、第 23 回（2015 年パナマ）博物館学的思考の多様性と融合、などが挙げられる。

②　MINOM：（新博物館学運動 Mouvement International pour une Nouvelle Museologie）

前述したように、ICOM 組織と併走する形で ICOM の外部に検討組織（加盟機関）を作り、自由な活動を進めてきた。MINOM は、1983 年ロンドンで組織化を決議し、1984 年ケベックで最初の国際会議を自主開催、1985 年にリスボンで正式に設立し、1986 年パリで UNESCO に正式登録（ICOM 加盟機関として）という流れで、現在まで活発に活動している。こちらのワークショップも、これまでほぼ毎年のように開催されている。

開催地と主なテーマを拾い出してみると、

1984 年ケベック「ケベック宣言」、 1985 年リスボン（セイシャルエコミュージアム）、 1986 年トーテン（イェストルムがその後、エコミュージアムブックをまとめノルウェー他で広まるきっかけとなった）、1987 年モリノス（マエストラツゴ文化公園という名称での活 動開始）、 1988 年カイコス、1989 年ロレーヌ、1990 年アリゾナ、 1991 年オアハカ（メキシコのコミュニティミュージアム）、1992 年オートボース（ケベックのエコミュージアム）、1996 年.パツクアロ、 1999 年サルバドール（第 9 回ワークショップ：若者と遺産、21 世紀に向けて）、 2000 年サンタクルス（II-EIE として、文化的・民主的参加）、 2005 年モリノス（ 第 10 回ワークショップ： 持続可能な遺産と領域、 2007 年リスボン：博物館学と社会学・社会博物館学 Sociomuseology の提案、 2010 年 11 月 9 日の ICOM 大会（上海）でワークショップ、中国、ベトナムなどでアジアの紹介、 2010 年 5 月 28-30 日 第 13 回 アムステルダムで、博物館・参加・社会、ヨーロッパ内での対話の必要性にふれる、 2011 年 第 14 回 サンチアゴ島、カーボベルデ、 2013 年リオデジャネイロ、博物館（記憶＋創造力）＝社会変革、 2014 年 博物館学と社会博物館学、そして 2016 年 ICOM ミラノ総会では CAMOC & ICOFOM & MINOM で“博物館と都市文化ランドスケープ、 同年の 2016 年第 17 回ワークショップをブラジルのナザレ、ロンドニアで開催、2017 年は社会博物館学：現実的な経験からの運動における詩的・政策的なもの、2018 年はコロンビアのボゴタでボゴタ宣言（ラテンアメリカの文化遺産の管理について）、 2019 年はスペインのルーゴで、第 20 回の国際会議として 4D 博物館学に向けて、社会的、環境的、政治的、経済的な持続可能性、

といったテーマが続いている。一貫して、新しい博物館学運動として、社会と一体感をもつことをテーマに、近年では「社会博物館学」というキーーワードを基軸に据えて、国際的な交流と言うより小さな地方の村に直接ワークキャンプのように訪問し、その環境での博物館化、独自文化の発掘とその前進をはかるものとなっているようである。

③　ICOM2016　ミラノ大会における特別プログラム「エコミュージアムとコミュニティミュージアム」

いよいよ 2016 年には全世界から参加者の集結する ICOM 総会（General Conference）において、特別セッション“SPECIAL PROGRAM ECOMUSEUMS AND COMMUNITY MUSEUMS”が開催された。報告がなされている（注 16）ので詳細は省略するが、ICOM の場で大がかりなフォーラムが行われたのははじめてのことと思われる。それが実現した背景には、まず、開催地が世界でももっともエコミュージアムに活発なイタリアであるということで、ヨーロッパの共通課題であるランドスケープの保全とインタープリテーションがミュージアムがイニシアチブを持って解決するという機会ととらえ、ブラジルのグループからの強い要請もあり、何よりも大会実行委員長の A.ガルランディーニ（Alberto Garlandini　現 ICOM 会長）が熱心に推し進めたということで実現したものである。

このときの国際的なフォーラムの意義について、ドヴァリーンがこれまでのエコミュージアムの総論として表した最近の著書の終章で、次のように述べている（注 17）。

確かにこの 45 年間、国際会議は数多く開催されてきた。最初は MINOM の会議、次に 1992 年から 2015 年にかけてブラジル人が招集した 5 回の会議、その他にもポルトガルや中国などで様々なイニシアチブをとった会議があった。しかし今回は、共通の課題として文化の発展を促進することを目的とした会議だった。

つまり、これがはじめて共通の課題をとりあげた国際的な会議であり、到達点であったと評価している。確かに、個別の地域からなる各地の報告ではなく、各国の様々な活動ネットワークを結びつけるメタ・ネットワークとして機能するフォーラムであったことは、これまでにない試みだったのかもしれない。まさにこの時に、国際的なネットワークとしての DROPS が生まれることとなった。

なお、その次の ICOM 大会（京都大会 2019）においてもフォーラム開催を期待する要望が強く、日本エコミュージアム研究会では大会期間中に、ICR（地方博物館国際委員会 International Committee of Regeonal Museums）と協働して、大阪の平野町で第一部を開き第二部は会期後ポストカンファレンスツアーとして神奈川県内で企画していたが台風直撃ににによりやむなく中止となった。詳細は既報（注 18）の通り。この際の記録論文集は開催に携わったミラノ工科大学の協力によって刊行されている（注 19）。

（４）ヨーロッパでの動き

フランスでは、ベルギー、カナダのフランス語圏のエコミュージアムも含まれてはいるが、フランス国内ネットワーク組織 FEMS（エコミュゼと社会博物館連盟 Fédération des écomusées et des musées de société,1989 年 Ecomusées en France として設立）があり、シンポジウムや集会をおこなっているが、国際間での相互交流という点では、大きな国際フォーラムのようなものは 2002 年にブザンソンで開かれている以外は開催されていない

ものと思われる。2002 年も基本言語をフランス語で実施したときく。また、1981 年には MNES（新博物館学と社会実験協会 Muséologie Nouvelle et Experimentation Sociale）が結成され、エコミュージアムや新博物館学のフランスにおける理論形成に取り組んだ組織もあるが、いずれもフランス国内の動きと考えられる。

一方、近年もっともエコミュージアムの成長をとげた国としてのイタリアを中心にここでは紹介をする。

① Local Worlds /Mondi Locali ヨーロッパ・エコミュージアム・ネットワーク「地方の世界」

イタリアのグループが主体となり活動をはじめた。関係者の相互研修、交流および活性化、新規設立のガイド等のための移動ワークショップを、単なる会合ではなく研修を兼ねた学校のようなものとして開催してきた。2001～2005 年には毎年イタリアで開催し、ネットワークは広がりを見せて「長いネットワーク long network」と呼ぶようになり、ヨーロッパ全体を視野にいれて展開をすることになった。2006 年には ベリスラーゲン（スウェーデン）で開催、この時のテーマは「歴史旅行、次は何か？」、2007 年はカセンティーノ（イタリア）、2008 年はルッチェ（チェコ共和国）で開催した際にはヨーロッパ景観条約（the ELT）の実践に関する国際会議が開かれた。一年おきにイタリアと欧州内他国との会場設定と思いきや、そこまでで、その後は国内ネットワークに集中して活動している。

② DROPS

イタリアの Mondi Locali が中心となって国内の連携を深めてきたが、2016 年 ICOM ミラノ大会をきっかけにイタリアが事務局となり、新たに地球規模の国際的ネットワーク DROPS が結成された。国際的ネットワークとして、Cultural Landscape（文化的景観）の担い手としてのエコミュージアムの役割を確認するセッションや各国のエコミュージアムのネットワークの交流をおこない、2016 ミラノ協同憲章（注 20）の作成と発行を実施した。

この中でイタリアとブラジルの交流はさらに深まり、2020 年になって、コロナ禍の中で、ブラジル（ABREMC）-イタリア間のビデオ会議を開催、共同して行動計画の策定などを進めている。

③ “Ecomuseums 2012”セイシャル会議

1st International Conference on Ecomuseums, Community Museums and Living Communities , in Seixal, Portugal

はじめての大規模な国際会議が、ポルトガルに本拠のある研究・研修企画団体 Green Lines Institute の主催で開催された。ポルトガルの代表的なエコミュージアムであるセイシャルにおいて、各国のエコミュージアム関係者が一堂に会した会議としてはかなりの規模であった。GreenLines により論文集が刊行されている（注 21）。

2014 年にも第 2 回が Montalegre で企画されたが場所と時期的に不利な条件により参加者が少なく結果的に 1 セッションのみしか成立せず、その後は続いていない。

３．会議テーマにみるエコミュージアムの課題

これまで 50 年におよぶ会議の変遷を見てきたが、当初はエコミュージアムの定義や、その本質的な目的の確認を繰り返し、その後は、多岐にわたる話題が議論されたはずだが、繰り返し課題となっているものや、地域や時期に応じて重点がおかれたり流行のようなものもあると思える。ここでは、テーマの中から特徴的な課題について 4 点ほどにまとめ、考察する。

（１）会議開催の意義：周辺分野の巻き込み

博物館学における挑戦に始まったエコミュージアムの発展と推進には、博物館関係者だけではなく、多様な専門家と市民が関与する。会議の場では、担い手としての市民アクターや、人類学、地域経済、観光、政治、建築、造園、都市計画、様々な分野が集い、実践に関する議論ができる点で、国際的であると同時に学際的・職際的な課題設定がなされる点がエコミュージアムの特徴だと言えよう。ドヴァリーンは、「コミュニティミュージアムは異端か？」（注 22）で、博物館学の専門の形式ばった勉強をしなかった人がコミュニティミュージアムのリーダーになっている、とし、ＧＨリビエールもミュージシャンだったしＪキナードも牧師、クルゾのＭエブラールは現代美術収集家、Ｊライオネは放射線技師、などの事例をあげている。会議での意見交換や議論はそうした多様な人々との出会いによって

深まっている。まさに社会の中での多様性の保持と一切の社会的排除への対抗など、現代的課題への対応を試み、その具体的な地域固有の方法としてのエコミュージアムの実践だからこそ報告しあう意義がある。そして今後とも、お互いの活動の相互理解にもとづくエコミュージアム推進者たちのコミュニティづくり、ネットワーク形成に結びついていくのだろう。

（２）環境問題への対応の希薄化

遺産の地域全体での保全という中心課題に関して、これまでの会議では、自然環境の保護に集中した報告はそれほど多くない。自然環境、文化財だけではなく、むしろ地域社会との統合という初期の理念は未だに中心課題となっている。そもそも初期のフランスでは地方自然公園などによってエコミュージアムが展開してきたわけだが、その分野はある程度の手法が定着してきたのか、ディスカッションする課題にも多くはあがらない。もともとの発想から、またエコミュージアムという名称からすると、もっと自然史系の博物館の参加があっても良いと思われるが、近年はやはり社会的に課題の多い無形文化遺産や庶民生活などの保全がエコミュージアムらしい課題となっている。エコパークなどと誤解されることも少なくなかった数十年前と比べると、考え方も普遍的に浸透してきたのではないだろうか。

（３）連帯とグローバリゼーション

とくにヨーロッパにおいては、意識として連帯と分断の往復運動を繰り返し、自国アイデンティティが不安的な状況に揺れ動いている。この 50 年間には、EU による国境の無化、その後にやってきたニューリベラリスムとグローバリゼーション、それに対応するかのような国家主義・極右の台頭、移民排斥、雇用問題、近郊のゲットー化などがとりわけ都市の問題となっている。このような時代に、連帯や協力、多文化共生などがしばしば課題としてあげられるようになった。エコミュージアムにおけるグローバリゼーションの意味を問い直す議論などもあった。M.ベレーグは、ル・クルゾ・エコミュゼにおける実践では「グロバリテ globality」が重視されたことを述べている（注 23）。グローバリゼーションと異なり、クルゾではエコミュージアムにおける“globality” とは、M. モースにより「綜合的な社会事実」と解釈され、サンチャゴ宣言における統合 integral 型ミュージアムへの志向というエコミュージアムの基本的考え方が基底にあると言えよう。しばしば会議でもテーマに挙げられるインクルージョンやダイバーシティに関して、今後は、さらに少数者や移民の排除に抵抗する社会的コンセンサスを得ていくことにエコミュージアムがどれほど力を発揮できるかが、問われると言えよう。

（４）ランドスケープのミュージアム

ヨーロッパにおいては、2000 年の ELC（欧州ランドスケープ条約 European Landscape Convention）締結が極めて大きな出来事であったらしく、エコミュージアムはまさにその ELC 実装のためのの有効な手段であるという認識が広まっている。エコミュージアムのプレゼンスを主張できるのはここの部分とばかりに、とくにイタリアでは、エコミュージアムのネットワークにより全国的な「ランドスケープの日」を開催するなど、活発に関わっている。日本の文化的景観が視覚的な景観に終始し修景的保全ばかり技術的に追求しているのに対し、ヨーロッパでは視覚だけでなく、様々な知覚全体をそもそも対象としている点が異なっているが、この点はエコミュージアムの成果として大きな意味を持ってくると思われる。ELC では landscape を「自然によってつくられる特徴、人の行動によってつくられる特徴、それら両者の相互作用の結果によってつくられる特徴からなり、人々が認識する広がりをもった地域である」と定義している。 土地の住民によって、風土の全体をより良い形の財産として次世代に継承していくのがエコミュージアムであるから、ELC を実装するスーパースターとして位置づけようというイタリアの戦略は成功しているように見える。

（５）まとめ

以上、エコミュージアムはそもそもひとりの発明でもひとつの出発点から始まったものでもなく、同時代の国際的交流の中から共通概念として浮かび上がってきたものであった。その創生期には、エコミュージアムというものの概念や理念を実践者自らが再認識して、さらに広く定着させるための活動として国際会議が活用された。会議の場所や時期により、様々な課題が浮かび上がってきたが、共通して未だに到達できていないものなども常に話題となり、

今後継続して議論していく必要性がある。日本ではこれまでなかなか実感をもって取り組まれていない、多文化共生社会づくりには、エコミュージアムの視点や活動は大きく貢献するはずである。国際的視野から共通してエコミュゼオロジーを考えるにあたって、いくつかのネットワーク組織が生まれてきたが、全世界を相手にした英仏西の博物館学から、植民地由来の地域社会を存立基盤として持つラテンアメリカへの眼差しは、エコミュージアムならではの展開として特徴的であると言えよう。アジアそして日本では何を社会課題として議論していくかは、50 年を経ったいま、考察すべき課題として問われている。

今後わが国でも、これまでのように直面する足下の地域課題と遺産活動に集中するだけではなく、自己満足や閉鎖を避け、世界の動きや課題に敏感に接し地球環境や文化的多様性、格差社会などを活動テーマに取り上げ、地域アイデンティティを地球規模や人類全体の中に位置づけるべく、相対化と連携が必要となっているのではないだろうか。

注（文献を含む）

（1）de Varine, H. (2005). "The origins of the new museology concept and of the ecomuseum word and concept, in the 1960s and the 1970s."、51-56、*Communication and Exploration 贵州生态博物馆国际论坛论文集*.　の p.51

（2）de Varine, H. (2017). *L'écomusée singulier et pluriel: Un Témoignage Sur Cinquante Ans De Muséologie Communautaire Dans Le Monde*, Editions L'Harmattan　の Prologue 部分（電子ブックのため頁記載不可能）

（3）たしかにその時のエコミュージアムの説明では、専門家ではない住民の参加の必要性を述べてはいるが、農村や都市といったある環境における生態的保全や環境の全体性を活かした展示の手法など、博物館の技術面からの説明となっている(下記 p.119 部分)　ICOM(1973), Symposium 'Museum and Environment", *Museum International*, 25:1-2, 119-120,

（4）この会議のエコミュージアムの展開に果たした役割の重要性に関しては、エコミュージアムの歴史を扱う多くの文献で触れられている。例えば Davis, P. (1999).*Ecomuseums :a sense of place*, Leicester University Press.や de Varine, H. (1985). "The word and beyond." *Museum International* 37(4): 185-185.　他。

（5）前掲書 Davis（1999）の p.56

（6）Mensch, Peter. von. (1992). *Towards a methodology of museology*, University of Zagreb.　P.26

（7）Mayrand, Pierre. (1985). "　The new museology proclaimed." *Museum International* 37(4): 200-201.

（8）この会議での議論の内容については下記大原（2001）で報告した。大原一興. (2001). "社会文化の過程としてのエコミュージアム--現代社会における議論をめぐって (特集 伝統文化の継承と発展--その新たな動き)." *都市問題* 92(6): 27-38.

（9）Priosti, O.et.al.（ed.）（2001）*II Encontro Internacional de Ecomuseus: Comunidade, patrimônio e desenvolvimento sustentável. IX ICOFOM LAM: Museologia e desenvolvimento sustentável na América Latina e no Caribe, Santa Cruz – Rio de Janeiro, Brasil, 17-20 maio de 2000*.　361p

（10）Maggi,M.(2005), TOWARDS A NEW CITIZENSHIP? , 11-16，*MUSEUM AND CITIZENSHIP*，QR 108, IRES,　Torino

（11）Corsane, G., Davis, P., Elliott ,S. (2005), Liberating museum action and heritage management through`inreach', 17-24，*MUSEUM AND CITIZENSHIP*，QR 108, IRES,　Torino

（12）Maggi, M. (a cura di), (2005), *Museo e cittadinanza. Condividere il patrimonio culturale per promuovere la partecipazione e la formazione civica*, Quaderni di ricerca Ires n.108, IRES, Torino,. 121p

（13）六枝原則は 2000 年に考案されたものだが、本会議で参加者により確認され満場一致で採択された。中国博物馆协会発行の*『中国博物馆』*（ISSN：1002-9648）、2005 年第 3 期号が、本会議「贵州生态博物馆国际学术论坛」の特集号で、このまとめの中で、会議運営を担った張晋平が六枝原則は「村民主体」「保護優先」が重要と述べている。

（14）Provincia autonoma di Trento. Assessorato alla cultura (2005), *Communication and Exploration –Guiyang China 2005*, Documenti di lavoro Trentino Cultura, vol.9, Ecomusei del Trentino

（15）ICOFOM 発行のニュース"ECOLOGICAL NEWS, Semi-Annual Bulletin of the ICOM-ICOFOM, Number2, March 1982 "より、1981.5 に前回ニュース（semi-annual bulletin no.1）に添付されたアンケートの結果が出ており興味深い。発足したばかりの ICOFOM メンバーにどのようなテーマ、分野に関心があり推進しようと思っているか、を問うアンケートが為されている。150 名のメンバーにあてて回答があったのが 32 名だけ（21.33%）で非常に低い回収率結果であると嘆かれていたが、そのうち 31 名の氏名と各人が選択した博物館学の項目との対応表が掲載されている。博物館学、博物館技術学としての項目 21 項目中、「Museum system theory」をもっとも多くの 18 名が挙げているのに対し、もっとも少なかった項目が「博物館建築」と「エコミュージアム」で、それぞれ 1 名ずつであった。ちなみにエコミュージアムを選択した 1 名はデンマークの博物館人である。

（16）本誌では、大原一興（2019）国際博物館会議ミラノ大会特別プログラム：エコミュージアムとコミュニティミュージアム、*エコミュージアム研究*、日本エコミュージアム研究会、23 巻、pp.54-66、2019.3。これに先駆けての ICOM 日本委員会の報告書では、大原一興（2017）国際委員会報告　特別プログラム　エコミュージアムとコミュニティミュージアム pp.115-116　*ICOM 大会報告書（第 24 回イタリア・ミラノ大会）*平成 29 年 4 月、ICOM 日本委員会、2017.9

（17）前掲書、de Varine, H. (2017).、"Epilogue Ecomusée ou écomuséologie ?"の章の部分。

（18）大原一興･井上敏 他（2021）, 2019 年度全国大会報告、*エコミュージアム研究*、pp.1-62、日本エコミュージアム研究会、25 号 2021.3

（19）Riva, R.(ed.)，(2018) *Ecomuseums and cultural landscapes State of the art and future prospects*, Maggioli Editore, 2018.01　412p

（20）前掲書（大原一興、2019）の中で、参考資料 1-3（pp.58-66）に、ミラノ協同憲章を掲載している。

（21）Lira, S., et al.（ed.）, （2012）Proceedings of *Ecomuseums 2012 1st International Conference on Ecomuseums, Community Museums and Living Communities*, Green Lines Institute for Sustainable Development, 451p

（22）de Varine, H.（2005）Is the community museum heretical ?, monograph unpublished, http://www.hugues-devarine.eu

（23）Bellaigue, M. (1992). "Local identity in the process of globalisation the ecomuseum questioned." *Nordisk Museologi:* 55-64.